OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーション－構造及び構造と背景との関連についての分析
Author(s)	施, 利平
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42234
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏名	施 利平（し りーびん）
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 15922 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学位論文名	国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーション －構造及び構造と背景との関連についての分析
論文審査委員	（主査） 教授 伊藤 公雄 （副査） 教授 直井 優　助教授 川端 亮

論文内容の要旨

本研究は日本に在住する一方が日本人で、もう一方は外国生まれ育ちの外国人であるカップルのコミュニケーション構造を明らかにすることを課題とする。

近年日本での国際結婚が年々増加している。これからも増加すると思われる国際結婚夫婦のコミュニケーションに焦点を当てることによって、日本人夫婦のコミュニケーションのあり方、異文化間コミュニケーションの特徴を明らかにすることができよう。

本研究は具体的に二部によって構成される。

第一部では、本研究の方法と課題（序章）、概観と先行研究（第2章）、本研究の方法論と分析の枠組（第3章）を紹介する。

第二部では質問紙調査のデータを用い、調査の概要（第4章）、コミュニケーションの構造（第5章）を明らかにしたうえで、文化・社会的環境要因とコミュニケーション構造との関連（第6章）、家庭内人間関係要因とコミュニケーションとの関連（第7章）を分析する。そして、最後に第8章で総括と問題点を述べる。

本研究で質問紙調査を行い、221人の有効サンプルを集めた。これらのデータを用い、第5章でまず因子分析によって夫婦間コミュニケーションには「相互理解」「会話行動」と「自己開示」という3つの因子が抽出された。「会話行動」は量的側面を表わすものであり、「相互理解」と「自己開示」はコミュニケーションの質的側面を表わすものとして存在することがまず明らかになった。

そして、第6章で全章で明らかになったコミュニケーション構造を用い、対象者の基本属性（性別、年齢、学歴、職業、外国人の日本での居住期間、結婚期間）、文化的要因（使用言語、言語能力、出身文化、相手文化への理解度）、及び、社会環境的要因（結婚生活が身近な人々に支持されているか否か、夫婦で周囲の日本人との付き合いの状況）は国際結婚夫婦のコミュニケーションにもたらす影響を分析した。

分析から国際結婚夫婦のコミュニケーションとその人の基本属性との間に有意な関連が見出せず、一方、文化的要因、社会的環境要因との間に有意な関連が見られた。

①夫日本人・妻外国人夫婦は妻日本人・夫外国人夫婦よりは、夫婦間の会話行動が多く、相互理解が高い。ただし、その理由はこのタイプの夫婦は婚姻満足度が高いからである。婚姻満足度が高いために、夫日本人・妻外国人夫婦は会話行動を多く行い、相互理解を高く評価すると分析の結果から読み取れる。

②言語能力（表現力を指すが）が高い人のほうが会話行動、自己開示が多く、相互理解が高い。そして、相手の文化をよく理解している人ほど、コミュニケーションにおける相互理解が高い。これらの要因の効果は満足度の効果をコントロールしても有意であることが確認された。

③社会環境要因とコミュニケーションとの関連に関しては、結婚生活が家族らに支持されているほど、会話行動と自己開示が多く、相互理解が高いことが分析が分かった。そして、この要因の効果は婚姻満足度の効果をコントロールしても有意であることが確認された。

④夫婦で周囲の日本人と付き合っている人ほど、会話行動と自己開示が多く、相互理解が高いことが分析で分かった。ただし、この要因自体はコミュニケーションに有意な効果を持たず、婚姻満足度を経由してコミュニケーションに影響をもたらしていることも確認された。夫婦で周囲の人々とよく付き合っていることから、かれらの婚姻満足度が高まる。婚姻満足度に刺激され、人々のコミュニケーションが活発となり、相互理解も高まるということが分析結果から読み取れる。

第７章では主に家庭内の人間関係要因からコミュニケーションを捉えようとする。家庭内人間関係要因を①婚姻満足度、②勢力構造（会話の主導権、決定権、文化優位性）という側面から見る。

分析の結果、以下のことが明らかになった。

①婚姻満足度は会話行動、相互理解との間に統計的に有意な関連があり、自己開示とは有意な関連が見出せなかった。つまり、婚姻満足度の高い人は夫婦間の会話行動が多く、相互理解が高い。

②会話が妻がリードしている家庭では夫の自己開示が少なく、夫婦間の会話行動が少ない。

③そして決定権に関しては夫、または妻が決定権を握っている家庭では夫婦間の相互理解が低く、物事を二人で相談し、決める家庭ではコミュニケーションにおける相互理解が高い。

④文化的優位性（適応パターン）はコミュニケーションの３因子のいずれとも有意な関連が見られた。文化的対立する夫婦、一方的に相手文化に譲歩する夫婦は会話行動が少なく、コミュニケーションにおける相互理解も低い。一方、一緒に第三の文化を創造している家庭では会話行動が多く、相互理解が高い。また、一方的に譲歩する家庭では自己開示が低いが、混合型の夫婦は自己開示がもっとも多い。

本研究の内容を全部要約すると、以下のことがいえるのだろう。

本研究の対象者たちはコミュニケーションを重要視し、夫も妻も積極的にコミュニケーションを行い、高い結婚満足度を得ている。この結果から、まずわれわれは国際結婚、そして異文化間コミュニケーションの可能性を見出せることができよう。

本研究は因子分析という手法によってコミュニケーションには量的に側面としての会話行動、質的な側面としての相互理解、自己開示が存在することがわかり、これまでの夫婦間コミュニケーションに関する研究を裏付け、さらに発展させることができた。

そして、これらのコミュニケーション３因子を抽出することによって、以下のことが見えてきた。

①言語能力は人々の自己開示にも、夫婦間の会話行動、相互理解にも影響を与えるが、一方、相手文化への理解度は人々の相互理解のみに影響を与えることがわかった。その理由としては、人々がコミュニケーションをする際に、情報をシンボルに置き返る作業（encoding）とシンボルを情報に読み返す作業（decoding）を行うときに、言語能力の低い人はまずシンボルを言語として選択しない傾向があり、更に非言語的なコミュニケーション・チャンネル、また婉曲なコミュニケーション・スタイルを明確した言語コミュニケーションのかわりに選択する傾向がある。つまり、言語能力によって人々のコミュニケーション・チャンネルの選択が異なってくる。それによって、言語によるコミュニケーションの量（自己開示、会話行動）が少なくなり、相互理解が低くなることが説明される。また、相手文化への理解度は人々が受け取った信号を解釈する時の枠組に影響を与え、相手の文化をよく理解している人は自分の文化枠組のみではなく、相手の文化枠組から相手の言動を解釈することができる。そのために、かれらの信号解釈・解読能力が高まると考えることができる。そのとき、かれらの相互理解が高くなる。つまり、コミュニケーションの３つの側面を明らかにしたことによって、異文化間コミュニケーションはコミュニケーションのメカニズムのどの部分に影響を与えるかを明らかにし、実証することができたといえよう。

②コミュニケーションの構造を明らかにしたおかげで、妻が会話の主導権を握っている家庭では、夫の自己開示が少

なく、夫婦間の会話行動が少ないという国際結婚夫婦にも、日本人夫婦にも共通したコミュニケーション・モデルを見出した、実証できた。このモデルを用い、夫婦間コミュニケーションの多くの部分を説明することができるだろう。

つぎに、本研究では婚姻満足度を含む家庭内人間関係から夫婦間コミュニケーションを捉えることの可能性が見出した。文化的・社会的要因の一部が婚姻満足度を経由して人々のコミュニケーションを規定することからも、そして、家庭内の勢力構造からもコミュニケーションをある程度説明できたことから、家庭内の人間関係からのアプローチは有意義であることが確認された。

つまり、結婚とはお互いの文化を融合して、新たな何かを作り出すことである。しかし、これが可能であるのは、家庭内の人間関係が平等であり、夫婦は常に対話することによって、互いを表現し、その違いを明らかにした上で、その違いを夫婦ともに納得するものに持っていこうと努力する人々に限るのであろう。かれらにだけは二人のそれぞれの持ち物から新たな何かを作り出すのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、国際結婚カップルにおけるコミュニケーションの実態を実証的に分析したものである。

これまで、日本における国際結婚カップルについての研究は複数存在している。しかし、そのほとんどが、「農村花嫁」研究や海外移住者の国際結婚など狭い切り口から考察を加えたものであり、日本国内における国際結婚カップルについて、より広い視野にたって考察を加えようとした研究は、これまでほとんどみられなかった。その意味で、コミュニケーション構造という視点から国際結婚カップルを詳細に分析した本研究は、この分野での従来の研究を大きく広げる成果を生み出したといえる。

先行研究について、国際結婚研究、異文化間コミュニケーション研究、家族社会学研究と、三つの分野での議論をまとめた上で、自ら設計した調査データを用いて、国際結婚カップルのコミュニケーションについて、コミュニケーションの構造分析をふまえ、文化・社会的環境要因、家庭内人間関係要因とコミュニケーションの問題を結びつけつつ、きわめて手際のよい整理をしている。

今後、日本における国際結婚研究においては、必見の研究となるものと予想される本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものと判定する。